

男子の部

三期生

思い出すまゝ

橋本 靖雄



私は高津ハンドボール部の創立は知らないが、過去と現在が大きく違ふ様に、当時の部員の状態の感じ、合宿等の憶えて居る事を記したいと思う。入部したのは中学二年の終りが三年だと思ふ。バレー・テニス・野球・バスケットへの入部者は多勢だった。最上級五年でチーム、四年一人、三年数名とリフト程度だった。当時の主将は高山さんだったと思ふ。メンバーで記憶にある人は、五年に高山、黒田、橋本、堀内、四年に稻本、三年に塩谷、林、米田、和山、山田や若村、そして私位である。やがて上級生が卒業し、三年の我々が主力として再建せねばならなくなった。杯、塩谷両氏と力を合はせ、同じ学年の部員募集をした。チームを作り、次の代に受け渡したのだ。当時の試合は、シニアとシニア

は、四・五年を含んだチーム、ジュニアは、三年以下のチームである。現在の新人大会のやうなものだ。戦績としては、ジュニア大会で準決勝迄行ったのが、最良の出場と思ふ。延長で北野に敗れた。シニアはあまり試合をしていない様子である。高一の時はすべての大会に参加したが、現在の様に参加料はとられないし、登録等もいらなかった。他チームは、上級生が二、三年ばかり、善戦するのが良い方で、勝つことはまれであった。けれど、高津にも組み易い相手があった。勝山校、二つも高一ばかり、けれど三年の時には、勝つたり負けたりする様になった。協会でもこのチームは高三になればきつと優勝と云われながら、高津独特の学内攻勢の為、チームの維持は出来ず、春の大会が引退試合で、高一へと変わっていくのである。この習慣は、徐々に変わっていった。次に練習の様手である。我々には一人として卒業生のコーチは来てくれなかった。まだ中学生の時は近藤さん(当時南学の現役)が来て下さっていたが、この人が来られる時は少し変わった。南学でも主将で相当やる人であつたらしい。上級生と練習をして居る時でも、一語に感じて居る位で、チームとしてはまとまらなかつた。

・唯、試合前だけはチームらしい感じも受ける練習である。他校では卒業生が一ヶ月位来てくるとか耳にするとかやしかつEが致しかたなかつた。当時の体育教官の岡本先生が、豊原川高へ連れて行って来て、齒科大のコーキを受けさせてくれた。これが最初で、しばらく齒科大のコーキが続きEと思つてゐる。高ニの時、教会の仕事をし、ハンドボールの村田先生が体育教官になられた。初めのうちは見てくださったが、我々も集りがわるくなり、だんだんみてくたさうなくなり他校に転校されてそれ切り。先生に対して不平もあつたが、我々にも反省せねばならぬところもあつた。高三になつて高一の多数の入部を得た。一年下は少なく三名で、又、熱意のない様であつたので期待せず、高一に希望を持ち、自分のふんだみみ味わふことなく過ぎせようと思つたが、後々は、部員でやはり少し苦勞した様であつた。又、物的にも恵まれていながつた。ボールにしても破れたら自分で縫つたり、パンクすれば自転車屋へ行つては、たり、教も少なくそれだけ大切にしてゐた。例之はボールをけると、運動場を人より二回余分にまわるとかしたものであつた。次に、一番苦しかつたのは合宿である。コーキはなし、付添の教官

はなし、炊事も交代で行い、用意さえすれば皆と同じだけ練習、体重も減つたことは確かだ。筋肉は痛いし、寝るところは三階と来ている。階段で何度も休んで上つた。苦しかつただけに印象深く残つてゐる。次に、部屋の件にしてもある部は幸福な方で、最初は運動場で着がえていた。やつとのことでもらうと、戸をつけて鍵をつけねばならなかつた。よくこわされるし物もなくなつた。最大の被害は試合中にズボンを取られた。どこの学校もよくあつたらしいが、我々は、まだ被害の少ない方であつたらしい。ルール上に於いても変化してゐる。オフサイドラインとラインアウトとだ。我々の最初は、首線でラインアウトはその場から留で投げた。卒業して十年もたつた。部の後輩は我々より、よい戦績と、よりよい態度と立派になつてゐた。卒業生に対する礼儀も、他の部に比べると非常によく、嬉しくも誇らしくも思つた。現役時代の苦しみは懐しく思いだされてきます。最後により一層の発展と活躍を祈つて居ります。